

名前から連想すること

1. ウスバカゲロウ

遊歩道の薄暗い場所を歩いていると、突然ヒラヒラと頼りなげに飛び出してきます。木の幹に止まっていたものが驚いて飛び立ったのです。静止中の個体を見つけることは、相当キョロキョロしていることと、偶然が必要です。翅はトンボのようですが、ウスバカゲロウはぼてっとした腹部、先端に球が付いたような目立つ触角で、すぐに区別できます。

カゲロウというと儂(はかな)いものの代表ですが、ウスバがつくと全く別のグループになります。幼虫はあの恐い捕食者で知られるアリジゴクです。一方、カゲロウは、幼虫が水中の石の表面につき、空中に出た成虫が2~3本の長い尾を持つ、軟弱な昆虫です。

ウスバカゲロウは一生を陸上で生活をします。幼虫は、必要な栄養分が摂取できるまで、2年でも3年でも餌を待ち続けます。7月ごろに蛹(さなぎ)になり、1ヶ月くらいで羽化、成虫になります。羽化時、一生で1回の糞をします。餌は体液のみを摂取しているので、ほとんど糞になる物質ができません。成虫は餌をとることなく、産卵すると一生を終えます。幼虫期間は不定の年単位の長期なのに対し、成虫期間は1ヶ月もなく、餌も摂りません。

アリジゴクには乾いた土が必要ですので、打吹山での生息場所は、長谷寺の仁王門の床下や大きな木の根元で雨のかかりにくい場所が選ばれます。もし濡れても、乾くまでじっと耐える力を持っています。



ウスバカゲロウ



カゲロウの成虫

2. ガンクビソウ



ガンクビソウの花



ガンクビソウの根生葉

キク科の多年草です。春の芽出しの時期はあまり特徴がなく、目立たない草ですが、花が咲くと存在感が出てきます。

漢字で書くと「雁首草」ですが、鳥のガンがどのような首をしているのか、見る機会は非常に少ないと思われます。飛翔している時のガンではなく、地上にいる時の頭部の姿勢から名付けられた煙管(きせる)の雁首(刻みたばこを詰めて火をつける)に似ているところからの命名です。キセルも珍しくなっていました。

ガンクビソウは、鳥のガン首よりもキセルの雁首の形によく似ています。枝先に1個だけ、総苞片(そうほうへん: 萼(がく)に相当)に包まれた頭花(小花の集合)が下を向いて付き、また、頭花が黄色であるところもタバコに火が付いている様子を連想させます。

よく似た同じような花をつける近縁のヤブタバコも、遊歩道脇に共存していますが、こちらは各葉の腋に頭花をつけるので区別できます。どちらも春の芽出し時につける葉はタバコの葉に似ていますが、タバコはナス科で科が異なり、これらにニコチンは含まれていません。葉は花の時期には枯れてしまっています。